

著者紹介（シンポジウムでの発言順）

鈴木杜幾子 明治学院大学教授

〔著書〕『画家ダヴィッド―革命の表現者から皇帝の首席画家へ』、晶文社、一九九一年。『ナポレオン伝説の形成―一九世紀フランス美術のもう一つの顔』、筑摩書房、一九九四年。『フランス絵画の〈近代〉―シャルダンからマネまで』、講談社、一九九五年。『フランス革命の身体表象―ジェンダーからみた二〇〇年の遺産』、東京大学出版会、二〇〇一年。（共著）『ポッティチェリ全作品』、中央公論美術出版、二〇〇五年。

新保淳乃 千葉大学特別研究員、武蔵大学、明治学院大学等非常勤講師

（すべて共著）『知識のイコノグラフィア』、ありな書房、二〇一一年。『ひとはなぜ乳房を求めるのか』、青弓社、二〇一一年。池田忍・小林緑編『ジェンダー史叢書4、視覚表象と音楽』、明石書店、二〇一〇年。

米村典子 九州大学芸術工学研究院准教授

（論文）「岡鹿之助とジュールジュ・スーラ」、『美術フォーラム21』第二三号、二〇一一年。「マリー・バシユキルツェフと伝記映画」、『芸術工学研究』第八号、九州大学芸術工学研究院、二〇〇七年。「〈描／書く〉女―マリー・バシユキルツェフとフェミニズム美術史」、神林恒道・中間裕子編『美術史をつくった女性たち』、勁草書房、二〇〇三年。

吉田典子 神戸大学大学院国際文化学専攻教授

（共著）『身体フランス文学』、京都大学学術出版会、二〇〇六年。Zola à l'œuvre, Presses Universitaires de Strasbourg, 二〇〇三年。（論文）「ゾラはマネを理解しきれなかったのか―マルメとゾラ的美術批評におけるマネ評価について」、『ステラ』三〇号、九州大学フランス語フランス文学研究会、二〇一一年。「マネ《テュイルリーの音楽会》再検討―（一）集団肖像画としての意味、（二）中心部分の謎」、『表現

文化研究』第十卷第一号、神戸大学表現文化研究会、二〇一〇年。(翻訳)ダニエル・アラス『モナリザの秘密―絵画をめぐる二五章』、白水社、二〇〇七年。エミール・ゾラ『ポヌール・デ・ダム百貨店―デパートの誕生』、藤原書店、二〇〇四年。

馬淵明子 日本女子大学教授

(著書)『美のヤヌステーオフィール・トレと十九世紀美術批評』、スカイドア、一九九二年。『ジャポニスム―幻想の日本』、ブリュッケ、一九九七年。(論文)「作られた〈母性〉―十九世紀末の母子像についての一考察」、鈴木杜幾子・千野香織・馬淵明子編『美術とジェンダー―非対称の視線』、ブリュッケ、一九九七年。「描かれた農婦―十九世紀フランスの農民画における主題をめぐる」、鈴木杜幾子・馬淵明子・池田忍・金恵信編『交差する視線―美術とジェンダー2』、ブリュッケ、二〇〇五年。

味岡京子 お茶の水女子大学アカデミック・アシスタント

(翻訳)タマル・ガープ『絵筆の姉妹たち―十九世紀末パリ、女性たちの芸術環境』、ブリュッケ、二〇〇六年。(論文)「二八九三年シカゴ万国博覧会〈女性館〉への日本の出品―〈女性の芸術〉をめぐる」、『人間文化論叢』第九巻、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科編、二〇〇六年。「大戦間期フランス、ステンドグラス職人マルグリット・ユレに見る〈モデル

ヌ〉」、「近代日本の女性美術家と女性像に関する研究」、科学研究費基盤研究(B)研究成果報告書、二〇〇七年三月。「大戦間期フランス、教会装飾に参加した女性芸術家たち―宗教芸術は女性に開かれた領域だったのか?」、『F-GENTS ジャーナル』第九号、お茶の水女子大学21世紀COEプログラム、二〇〇七年。

香川 檀 武蔵大学人文学部教授

(共著)『記憶の網目をたぐる―アートとジェンダーをめぐる対話』、彩樹社、二〇〇七年。「言説がつくりだす創造性の性差―ドイッ表現主義と女性芸術論」、姫岡とし子・川越修編『ドイッ近現代ジェンダー史入門』、青木書店、二〇〇九年。「心理的トポスとしての〈場〉の記憶―レベッカ・ホルンの〈花嫁機械〉」、『武蔵大学人文学会雑誌』第四一巻第三・四合併号、二〇一〇年。

中嶋 泉 明治学院大学ほか非常勤講師

(論文)「田中敦子の円と線の絵画」、『言語社会』五号、一橋大学大学院言語社会研究科、二〇一一年。「Yayoi Kusama Between Abstract and Pathology” in *Psychonahsis and Image*, Griselda Pollock ed., Blackwell Publishing, 2006. (翻訳)グリゼルダ・ポロック「性のヴィジョン、仮想フェミニズム美術館道遥―一九二〇年代を中心に」、竹村和子編『ジェンダー研究のフロンティア5、欲望・暴力のレジーム―揺らぐ表

象／格闘する理論』、作品社、二〇〇八年。

天野知香 お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授

〔著書〕『装飾／芸術―十九〜二十世紀フランスにおける「芸術」の位相』、ブリュッケ、二〇〇一年。〔共著〕「過程にある絵画」、田中正之・天野知香・読売新聞東京本社文化事業部

編『マティス Processus/Variation』展カタログ、国立西洋

美術館、二〇〇四年。〔論文〕「視覚（芸術）における身体

―フェミニズムにおける美術史の再検討」、竹村和子編『ジェンダー研究のフロンティア5、欲望・暴力のレジーム―揺ら

ぐ表象／格闘する理論』、作品社、二〇〇八年。「美術史をほどく―マリー・ヴァシリエフとモダニズムの時代」、池田忍・

小林緑編『ジェンダー史叢書4、視覚表象と音楽』、明石書店、二〇一〇年。